離反者出現パターンと集団の崩壊

九州大学 吉 武 久 美 子¹

The emergence patterns of revolvers and break-down of the group

Kumiko Yoshitake (*Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Kyushu University, Higashi-ku, Fukuoka 812*)

This experiment was conducted to assess the influence of response patterns of revolvers on conformity. The subjects were 39 undergraduate students who were given an opinion task for 12 trials. They were divided into the successive and intermittent revolution conditions, in which revolvers emerged from the group successively after consensus trials and intermittently, respectively. Under the successive revolution condition the conformity rate on revolver-emergent trials were significantly lower than that for consensus trials, while under the intermittent revolution condition the conformity rates on revolver-emergent trials and on consensus trials were not significantly different. After the experiment the subjects were asked to indicate their private opinions. Subjects in the successive revolution condition indicated fewer conforming opinions than those in the intermittent revolution condition. It was concluded that with the same number of revolvers and of revolutions effects of revolvers vary according to their emergence pattern.

Key words : group, break-down, conformity, revolvers, consensus.

集団は形成される。しかしその後存続し、その規模を増して成長していく集団もあれば、分裂、崩壊していく集団もある。このうち、集団の形成、発達については従来研究がなされてきたが、集団の分裂、崩壊についてはほとんど研究がなされていない (Tuckman, 1965; Wanous, 1980; Wanous, Reichers, & Malik, 1984)。ここでは、この集団の崩壊過程に目を向け、どのような条件の下で集団の崩壊が進むのかを検討したい。

さて、集団崩壊には、全員が一致団結していた集団に少数の離反者が出現したことがひきがねとなって、集団の崩壊が促されるという場合が考えられる。これまで Schachter (1951) は、集団に逸脱者が存在する場合、他成員は逸脱者にコミュニケーションを多くし、集団の方向に考えを変えさせようと試みるということを示した。しかし、逆に離反者の方向に集団の他成員の方が考えを変えてしまい、それまでの集団が崩壊してしまう場合もあると考えられる。このような離反者の効果についてはこれまでほとんど研究がなされていない。

集団と異なることを主張する少数者が集団に与える影響については、Moscovici & Lage (1976), Moscovici & Personnaz (1980) の少数者研究がある。しかし、そこで主に考えられてきた少数者 (あるいは逸脱者) は、はじめから一貫して多数者と異なる意見を主張するという固定的状況である。

また、同調研究の中には社会的支持者の研究 (Allen,

1975) がある。そこでは、誤った回答を行う集団の中に 1 人の正しい回答を行う少数者 (これを社会的支持者と呼ぶ) がいる場合、集団への同調率が急激に減少することが見出されている。しかし社会的支持者は誤った集団の中から離反して正しい回答を行うという形の動的な少数者ではなく、もともと集団とは異なる意見を主張している固定的少数者である。つまり、ここでも、集団が発達し、そこに少数者 (離反者) が出現するという動的な少数者の影響についてはほとんど考えられていない。

そこで、本研究では、はじめは 1 つの集団であった成員の中から、離反する少数の成員が出現することによって、集団に亀裂が生じるという動的な状況を想定する (これまでとりあげられてきた固定的な少数者ではないことから、少数者の中でもこれを離反者と呼ぶことにする)。そして、この離反者という少数者が集団の崩壊に及ぼす効果を検討したい。

まず、離反者の出現には、集団の中から一挙に連続して離反する場合と、何度かにわたって断続的に離反して集団に異論を唱える場合とがある。集団のこれまでの意見に対して異論を唱えて集団を変えようとする試みにはこの 2 つが考えられる。このどちらの方がより効果的に離反者をクローズアップさせ、その結果離反者へと続く人を生じさせ、結果として集団を崩壊させることになるのだろうか。2 つの離反パターンと集団の崩壊の関係を検討したい。

集団の崩壊については、何ををもって崩壊とみなすかという問題があるが、本研究ではその集団への同調率の低下をその指標とする。

¹ 本論文作成にあたり、ご指導いただきました九州大学野素朗教授に感謝いたします。

Table 1
課題 (8 個の情報)

- (1) 立候補の回数は今回で B, C—新人, A—2 回目, D—3 回目 (現職) であった
- (2) 前回の投票率は高かった
- (3) 住民には知識人も多かった
- (4) 今回は激戦になるかもしれないと地元〇〇紙は予測した
- (5) C は若く行動力のある人物であった
- (6) B は清潔潔白なイメージで売り込んだ
- (7) A は弁護士出身であった
- (8) D は中央との人脈があり, 熱心な支持層を持っていた

このように考えて, 離反者の数は同じでも, 離反するパターンの違う次の 2 条件を設定し, 集団への同調率の違いを検討する. 2 条件は以下の通りである.

(1) 全員の意見が一致する状況と離反者が出現する状況が交互に現れる断続的離反条件, (2) 全員の意見が一致している状況が続いた後に, 離反者が続けて出現する集中離反条件である.

目 的

集中離反条件と断続離反条件での集団への同調率を比較検討する.

方 法

被験者 大学生男女 39 名 (男 20 名, 女 19 名). 集中離反条件 (男 10 名, 女 11 名). 断続離反条件 (男 10 名, 女 8 名). 5 人 1 集団.

課題 ある県で十数年前に行われた (実際は架空の) 首長選挙に関する 8 個の情報 (Table 1) を読み, 4 人の候補者 A—D の中から当選者を 1 人選び答えるという課題 (大学生 30 名を用いた予備調査より 86.67% が D と回答する課題であることが見いだされた) である.

実験条件 被験者は他の被験者の判断についての情報 (実際には実験者の与える偽情報) を手がかりに, 12 試行の回答をする. より自然状況を模したものにするために, つぎのように Block 1 (以下 B 1 と略す) —B 3 を設定した. B 1 (第 1—2 試行), B 2 (第 3—4 試行), B 3 (第 5—6 試行) で A と回答する成員が 1, 2, 3 名と増加していく. ここまでは 2 条件とも共通である. 次に集中離反条件では 7, 8, 9 試行で全員一致し, 10 試行で 1 人離反, 11, 12 試行で 2 人離反する. 断続離反条件では全員一致するのは 7, 9, 11 試行であり, 8 試行で 1 人離反, 10, 12 試行に 2 人が離反する (Table 2 参照).

手続き 被験者は同じ大学の学生 (同性) である. 1

Table 2
12 試行での他者 4 人の回答

集中離反条件	試 行											
	B1			B2			B3			B4		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
AAA	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
CAC	C	C	C	C	A	A	A	A	A	A	C	C
CAA	C	C	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
DAD	D	D	D	D	D	D	A	A	A	D	D	D

A の人数 1 1 2 2 3 3 4 4 4 3 2 2

断続離反条件	試 行											
	B1			B2			B3			B4		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
AAA	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
CAC	C	C	C	C	A	A	A	A	A	C	A	C
CAA	C	C	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
DAD	D	D	D	D	D	D	A	D	A	D	A	D

A の人数 1 1 2 2 3 3 4 3 4 2 4 2

つの部屋で 5 人一斉に実験課題を行い, それが見えるように椅子が配置されている. 各被験者の机上には自分の回答用押しボタンと, 自分を含めた参加者 5 人全員の回答が表示されるパネルが設置されている. 全員が着席しヘッドフォンを装着すると, 次のような主旨の教示が与えられた. ①ある県で十数年前に行われた首長選挙についての 8 個の情報を読み, 当選者を判断する課題であること, ② A B C D という 4 候補の中から当選者を正確に予測し, 正解と思うものを 1 つ選び, 回答用押しボタンを押して答えること, また, ③この課題は何度も繰り返し行い, 各々の情報をいろいろな観点から熟考することにより, 情報の関係認知が深まり, 正確な判断が可能になること, ④今まで行った実験結果からも, 繰り返し判断を行うにつれてほとんどの人が正解に近づく非常に正解度の高い課題であること. これらの教示は回答を何回も繰り返すことと他者の回答が一致していくことの不自然さを減少させ, また, 他者の回答への同調の圧力を強めることを目的とした. 教示終了後, 回答順番を決めるためと称して各被験者に 1—5 の数字の 1 つが書いてあるカード 5 枚の中から 1 枚を選ばせた. しかし全カードは 5 であり, 全被験者の回答順番は常に, 操作された 4 つの回答が表示された後の 5 番目である. 各試行で被験者は 1 組 (8 個) の情報を 30 秒間読む. この情報は試行ごとにその提示順序が変えてあり, 読むたびに 1 回判断を行う. 各試行で, 正解 D でなく多数者と同じ A と回答するか否かが同調の指標である. これを 12 試行行う.

12 試行の実験終了後, 同調行動を行った人がどれくら

いその行動を内面的にも受容しているかをみるために、同じ8個の情報を2分間読む時間を与え、個人状況(P)で再度、回答を紙に書くことを求めた。

また、一緒に実験を受けた他の4人はこの個人状況(P)でA B C Dのうち何と答えると思うかについても記入を求めた。

更に、離反のパターンの違いによって、離反者への印象が異なるかどうかを実験後質問紙で調べた。すなわち他者4人(4人の内、一貫してAの回答を行った人をAAA, CからAに同調しCに戻った人をCAC, CからAに同調した人をCAA, DからAに同調し初めに離反してDに戻った人をDADと呼ぶ)について、実験中の各々の回答をどれくらい正しいと思うかを7点尺度で回答させた。

その後、実験の本当の主旨を被験者に説明し了承を得た。

結 果

同調率の変化 Biにおける同調率(%)=(BiにおいてAと答えた回数/Biの全試行回数)×100 (i=1, 2, 3, 4, 5)。

まず、2条件ともに共通の操作をおこなったB1—B3について、2(条件)×3(B1—B3)の分散分析を行った。B1—B3において、2条件の同調率に差はなかった。

そこで、離反者の出現パターンによる同調率の違いを検討するために、集中離反条件と断続離反条件についての、全員一致試行と離反者出現試行(各3試行)を比較した(Fig.1 参照)。条件2(集中・断続)×試行2(全員一致・離反者出現)の同調率を分散分析の結果、交互作用に有意な差が見いだされた($F=4.58$, $df=1/37$, $p<.05$)。下位検定の結果、集中離反条件でのみ、全員一致

Fig. 1. Rates of A(group) opinion in continuous and intermittent conditions.

試行と離反者出現試行の同調率に差がみられた。すなわちこの条件下では、離反者出現試行で、全員一致している試行より同調率が低いという結果であった($F=6.00$, $df=1/37$, $p<.05$)。

更に細かく、離反者出現試行の3試行をそれぞれ別々に、集中離反条件と断続離反条件の比較を行った。離反者出現1回目の試行(集中離反条件では第10試行, 断続離反条件では第8試行)と、2回目の試行(集中離反条件では第11試行, 断続離反条件では第10試行)では同調率に条件の差はなかった。3回目の試行(集中離反条件では第12試行, 断続離反条件では第12試行)において条件の差がみられ($\chi^2=4.13$, $p<.05$)、断続離反条件より集中離反条件の方が同調率が低かった。

また実験終了後、個人状況(P)で被験者に再度回答させた。その結果について、多数意見と同じAと答えた被験者の数の χ^2 検定を行ったところ、断続離反条件より集中離反条件の方がAと答える被験者が少ない傾向がみられた($\chi^2=2.97$, $df=1$, $p<.10$, Fig.1 参照)。

更に、個人状況(P)で被験者に、他者4人は同じ個人状況でA B C Dのうち何と答えたと思うかを、4人それぞれについて記入させた。それをもとに4人中何人をAと回答すると思ったかについて、2(条件)×2(同調者, 非同調者)の分散分析を行った。その結果、条件の主効果がみられた($F=11.75$, $df=1/35$, $p<.01$)。同調, 非同調の差はみられなかった。すなわち、同調者も非同調者も、断続離反条件より集中離反条件で、Aと答える他者の人数を少なく考えている。

質問紙 他者の回答の正しさについて、条件2(集中, 断続)×2(同調, 非同調)×他者4(AAA, CAC, CAA, DAD)の分散分析を行った。その結果、同調, 非同調の主効果($F=4.18$, $df=1/35$, $p<.05$)、他者の主効果($F=4.48$, $df=3/105$, $p<.01$)がみられた。また、条件×他者の交互作用($F=3.60$, $df=3/105$, $p<.05$)、同調, 非同調×他者の交互作用($F=3.06$, $df=3/105$, $p<.05$)がみられた。下位検定の結果、集中離反条件では、離反者であるCAC, DADの正しさについては、同調者も非同調者もその評価に差がなかった。しかし一貫してAを続けたAAAと、3試行目から同調したCAAについては、同調者と非同調者で評価に差が生じており、同調者の方がAAAとCAAに対する評価が高かった(AAA: $F=11.42$, $df=1/140$, $p<.01$, CAA: $F=8.74$, $df=1/140$, $p<.01$)。一方、断続離反条件では、同調者も非同調者も他者4人を同じように評価していた。

考 察

集中離反条件と断続離反条件は、共通の操作を行った6試行(B1—B3)まではAと回答する率に差はない。

その後、条件操作を行った第7試行から12試行において、集中離反条件では、全員一致試行より離反者出現試行において、Aと回答する率が有意に低くなる。これは、離反する人数は同じでも、集中離反条件で試行の後半に集中的に離反すると、離反者が出現したということが明白になる上、集団が分裂、崩壊へ向かっているとの方向性が生じるため、集団への同調率（A回答率）が減少したのではないかと考えられる。一方、断続離反条件では、全員一致試行と離反者出現試行でのA回答率に差がなかった。断続離反条件では、離反者が集団から離反し、集団へ戻り、また離反しということを繰り返す。この状況では、今後集団が分裂していくのか、再び一致するのか、方向性が明白でない。そのために離反人数及び回数は集中離反条件と同じでも離反の効果は弱く、離反者出現試行においても、全員が意見を一致させている試行と同じ程度に多数者への同調行動が生じると考えられる。

また、個人状況で紙に書いて答えさせた結果によると、集中離反条件の方が断続離反条件よりAと回答する被験者が少ない。集中離反すると、他者といっしょにいない状況になっても、集団意見を選ぶことが少なくなるといえる。離反者の効果が個人状況でも持続するのである。

更に、個人状況での他者4人の回答についても予測させたが、自己の回答の結果だけでなく、他者についても集中離反条件のほうが断続離反条件よりA回答が少ない。これは他者も個人状況になれば自己と同じくAと答える人は少ないだろうと考えることによって、自己回答と他者回答の間の矛盾をなくし、認知的不協和を解消させるためと思われる。

質問紙の他者回答の正しさについては、集中離反条件でのみ、4人の正しさについての評価が分かれる。同調者はAAAとCAAを高く、非同調者は低く評価している。試行後半に離反するCACとDADについては同調者も非同調者も同じように正しさの評価が高い。断続離反条件ではこのような違いがない。この結果からも、離反パターンが離反者の与える印象に大きな意味を持つこ

とが示唆された。

以上のことから、同一人数（5人中2人）が同一回数離反しても、その離反パターンによって、被験者に与える効果に差があることが見いだされた。現実には多数者数と離反者数は同じでも、このように集団への同調率が異なるのは、それまでの離反パターンにより今後の予測（集団が崩壊に向かうかどうかなど）が行われるからではないかと推察された。そこで今後は、現実の多数者の人数からくる現実圧力と集団の今後の変化についての予測からくる予測圧力についての検討が望まれる。

引用文献

- Allen, V. E. 1975 Social support for nonconformity. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 9. New York: Academic Press. Pp. 1-43.
- Moscovici, S., & Lage, E. 1976 Studies in social influence III: Majority influence in a group. *European Journal of Psychology*, 6, 149-174.
- Moscovici, S., & Personnaz, B. 1980 Studies in social influence V: Majority influence and conversion behavior in a group. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 353-368.
- Schachter, S. 1951 Deviation, rejection, and communication. *Journal of Abnormal Social Psychology*, 46, 190-207.
- Tuckman, B. 1965 Developmental sequence on small groups. *Psychological Bulletin*, 63, 384-399.
- Wanous, J. P. 1980 *Organizational entry: Recruitment, selection, and socialization of newcomers*. Reading, Mass.: Addison-Wesley.
- Wanous, J. P., Reichers, A. E., & Malik, S. D. 1984 Organizational socialization and group development: Toward an integrative perspective. *Academy of Management Review*, 9, 670-683.

—1987. 11. 14. 受稿, 1988. 3. 12. 受理—